

北海道中央ユーラシア研究会 第104回例会

手織り物はどのような財産か
—ウズベキスタン・カシュカダリヤ州北部の事例から—
宗野ふもと

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程)

日時：2013年1月12日(土) 14:30-17:30

場所：北海道大学スラブ研究センター4階小会議室 401

討論者：菊田悠（日本学術振興会特別研究員／北海道大学スラブ研究センター）

司会者：宇山智彦（北海道大学スラブ研究センター教授）

出席者：11名

<報告要旨>

本報告は、ウズベキスタン・カシュカダリヤ州チロクチ地区で制作されている手織り物がどのように売買されているのかを、牧畜と農耕という生業の差異を基盤にして成り立つバザールを結節点とした物の流通に着目して明らかにすることを目指す。そして、売買に携わる人々が手織り物をどのような財産と位置づけているのかを、市場経済へと移行するウズベキスタンの社会経済状況との関わりから考察する。

報告者は、2009年9月から2011年10月にかけてウズベキスタンに留学をし、そのうちカシュカダリヤ州で約15ヶ月間のフィールドワークを行なった。報告者は、手織り物がバザールで売られ、他の地域に流通していること、その背景には牧畜と農耕という生業の違いを基盤にした物の流通があるということを知った。グローバル経済とはレベルの異なる経済のありようを手織り物を事例にまとめたいと思ったのが、本報告のきっかけである。

報告内容は、チロクチ地区の二つの手織り物バザールでの観察と聞き取り調査をもとにしている。調査から、一般的に売り手は手織り物の生産者でバザール周辺の住民であること、また彼らは、一時的な出費に対処するために手織り物を売っており、恒常的にバザールに来ていないことが浮かび上がった。一方で、買い手の中には一定数仲買人がおり、彼らは、バザールで手織り物を買付け、農耕を主な生業とする隣接するキタブ地区などで転売していることが明らかとなった。牧畜を主な生業とする調査地とは異なり、キタブ地区は水が豊富なため農耕が盛んな一方、牧畜の産物である羊毛を利用した手織り物制作は盛んではないので転売ができるのである。



手織り物売買は、不慣れな売り手と交渉を熟知した仲買人との間で行われることが多い。交渉は決裂を繰り返しながら長時間に渡ることもあるが、やはり仲買人が交渉の主導権を握っているように見えた。しかし、仲買人への同行調査や聞き取り調査から、仲買人が手織り物商売で得ている利益は家計の主たる収入源としては頼りにならず、種々ある副業の一つとして位置

づけられていることが浮かび上がった。

それでは、薄利にもかかわらず手織り物が売買されているのはなぜなのか。売り手にしてみれば、手織り物は売るために制作されたものではない。一時的に家計に不足が出た場合に換金される収入源として位置づけられている。背景には、調査地の主な収入源である牧畜、日雇い労働、公的扶助・給料の支払いが不安定なことがある。売り手にとっては、目の前の出費に対処できる分の現金に換金されればよいのである。

仲買人にとっても手織り物は大きな利益をもたらしていない。その背景には、近年急速に普及している機械織り絨毯との競合が転売先で起きていることがある。機械織り絨毯はサイズの多様さやデザインの目新しさから、手織り物よりも魅力的なものとして転売先の人々の目に映っている。また、大量生産のためそれほど高価ではない。こうした状況で手織り物を売るためには、値段を機械織り絨毯よりも低く抑える必要がある。

交渉の間では売り手と買い手は最大の利益を求めるが、構造的に手織り物は大きな利益をもたらさない。それでも売買が継続されるのは、不安定な経済状況の中、多くの収入源を確保し生計維持をはかる人々の生活において、手織り物が、織り上げてしまえば／買い付けてしまえば、家畜のように手間がかからず保管しておくだけでよい蓄財手段・現金獲得源として位置づけられているからである。

【記：宗野】

<参加記>

報告に引き続いて、ウズベキスタンをフィールドに人類学的な研究を行っている、菊田悠氏よりコメントがあった。まずこの地域の調査が困難であることをフロア全体に周知した上で、博士論文の中で、この報告がどのような位置づけにあるのかを質問した。報告者は、博士論文の主要なテーマは、生産地における手織物の位置づけであり、売り物としてどのように位置づけられているのかを見ることにあり、本報告はその中の1トピックであると回答した。その上で、さらに将来的には、制作者である女性の生活史における手織物の意味や持参財としての意味などについても突きつめていきたいとも回答した。これを踏まえつつ、菊田氏は今後研究を進めるにあたってのいくつかの指針を示した。

まず、モノの人類学として研究を進めるのであれば、消費の現場について、さらに研究を進める必要があると指摘した。また、バザールに注目して研究を進めるのであれば、この報告で言及されたギアツによる研究に留まらず、それ以降の研究の発展も意識しながら議論を進める必要があると指摘した。加えて、いずれの方向に進むにせよ、歴史的な軸を導入する必要があるとして、特にソ連以前にこのような流通の経路があったのか、仲買人がソ連末期にも見られたのかについて質問した。これらについては、まだ明らかでなく、今後の課題とされた。その他、菊田氏のフィールドであるフェルガナ地方では、この報告で示された様々な布の名称が知られていないと指摘し、ブハラでは魔除けの模様を縫い付ける場合があるが、ここでは見られないなど、地域的な差異の存在も示唆した。

この後フロアに開かれた議論でも、活発な質問・意見の交換があった。まず注目されたのが、バザールの組織がいかなるものであり、行政などとどのような関係にあるかであった。バザール組織は、敷地の提供と管理を主に行っており、そのトップに立つバザール長は、公募で選ばれて、敷地の整備や場所代の管理に責任を持つ立場にあると返答があった。も

つとも、組織自体の位置づけや、より詳細な組織構造などの解明は今後の課題であるとも回答した。また、比較的近場にあるサマルカンドなどに売りに出すようなことはないのかという質問に対しては、縁故が重視される社会において、積極的に外部に出ることは考えられていないと回答があった。さらに、仲買人について、これを一括りにするのではなく、扱う商品などによって腑分けする必要があるのではないかという指摘もあった。



このほか、ロシアにおける質問者の現地調査を踏まえて、村における「なりわい」として手織物制作が行われており、特に財という位置付けがなされているわけではないのかという質問もあった。またこれと関連させつつ、「町の住民」と「村の住民」という意識の差異の中に、手織物制作についての位置づけの反映が見られるのではないかという指摘もあった。これについて、報告者は、こうした問題も意識しながら様々な語りの分析・収集を行っていきたいと返答した。

さらに、ウズベキスタンや中央アジア全体の地域研究者の視点から見ると、この地域に関する研究はいまだに手薄であり、今後こうした実証研究が一層進むことへの期待も述べられた。そして、この地域の特殊性をより引き出すためにも、より地域間の差異を明確にする必要があると指摘があった。特に、この地域の部族系譜と手織物を結びつける研究や、敷物の分布に注目することで、地域間の関係などを明らかに出来るのではないかという助言もあった。

本研究は、具体的かつローカルなモノに注目しつつも、その背景にある地域間の関係や、グローバルな市場化と地域社会の関係について、議論を進められる可能性がある。今後は、議論の中でも指摘のあったように、歴史的なダイナミズムと、地域間の流通により注目する形で議論を発展させていくことが期待される。

【記：桜間瑛（北海道大学大学院文学研究科博士後期課程）】